



太宰府市民遺産

第5号

万葉集つくし歌壇



太宰府市民遺産とは・・・

市民の一人ひとりが、大切に思うモノ・人・出来事。これを将来に伝えていきたいと思う物語と、守り育てる活動に対して、多くの市民が太宰府にとって大切なだと納得したものです。

太宰府市民遺産（太宰府市景観・市民遺産会議で認められた宝）
＝守り・育てたいモノ＋守り・育てたいモノが歩んできた物語＋守り・育てたい「ちから（活動）」
【「ちから（活動）」の源となる物語（思い）】



■例えば

- まちづくりの基礎をつくりあげた人
- 四王寺山の堂々たる姿が見える場所
- いつもお詣りしているお地蔵さん
- 道ばたにある、むかしの道標
- おばあちゃんがやってる数珠くり
- 40年つづく団地の夏まつり

など、将来に伝えたい太宰府の個性がたくさんあります。



太宰府市民遺産ロゴマーク

万葉集つくし歌壇

太宰府市民遺産：第5号
認定：平成23年11月20日
景観・市民遺産育成団体：太宰府万葉会
発行日：平成27年2月21日

太宰府市景観・市民遺産会議【URL：<http://www.市民遺産.jp>】



太宰府万葉会

太宰府万葉会

太宰府万葉会は、平成9年(1997)に太宰府市働く婦人の家で開かれた太宰府の歴史・文学を学習する講座をきっかけに発足しました。以来、毎月2回の例会で故・山内勇哲先生の講義を中心に、つくし歌壇をはじめ万葉集の勉強を続けてきました。

現在は、毎月1回の講座と年2回の講演会を開催しています。毎年2月には、梅花の宴の再現を市民参加を募って開催し、また、学校や文化施設での出前授業や万葉歌碑めぐりなどを通じて、多くの人に万葉集つくし歌壇を伝える活動を行っています。



山内勇哲先生



歌碑めぐりのようす



梅花の宴の再現

会員それぞれの特技を活かし、いつも手作りでの会の運営を行っています。これまでに製作した万葉衣装は100着を数えます。



平成26年度文化庁文化芸術振興費補助金
(文化遺産を活かした地域活性化事業)

万葉集つくし歌壇



梅花の宴

天平二年(七三〇)正月十三日、大宰帥大伴旅人は邸宅に大宰府と管内諸国の官人三人を招き、梅を題材に歌を詠む宴を催しました。この時に詠まれた三首が万葉集に収められています。

日本最古の歌集『万葉集』には、約四五〇〇首のうち大宰府を舞台とした歌が二〇〇首あまり収められています。

その中には、神亀四年(七二七)に大宰帥に着任した大伴旅人をはじめ、山上憶良(筑前守)、紀男人(大弐)、小野老・栗田比登(少弐)、沙弥満誓(造観世音寺別当)、大伴坂上郎女らが詠んだ優れた歌があります。なお筑紫歌壇の名称は、彼らの生活圏にちなんで後世に名付けられたものです。

わが苑に梅の花散る

ひさかたの天より雪の流れくるかも

卷五 八三二 主人(大伴旅人)

「私の庭に梅の花が散っている。それとも天から雪が流れているのであろうか」

梅の花散らくは何処

しかすがにこの城の山に雪は降りつつ

卷五 八三三 大監伴氏百代

「梅の花が散るといっただけでどこであろう。それはそれとして、この城(大野城)の山には雪が降り続けている」

万葉集に詠われた大宰府の情景

大野山霧立ち渡る

わが嘆く息嘯の風に霧立ちわたる

卷五 七九九 山上憶良

大伴旅人は大宰府に赴任して間もなく、最愛の妻を亡くします。この歌は、悲しみに暮れる旅人に向けて山上憶良が詠んだもので、旅人の心情を代弁しています。当時、霧は溜息から生まれると考えられていました。

「大野山(四王寺山)に霧が立ち渡っている。私の溜息が霧になって立ち渡っている」

娘子児島

凡ならばかかもせむを

恐みと振りたき袖を忍びてあるかも

卷六 九六五

「あなたが平凡なお方なら、ああもこうもしましように、恐れ多くて振りた袖を振らずにこらえています」

倭道は雲隠りたり

然れどもわが振る袖を無礼と思ふな

卷六 九六六

「大和への道は雲に隠れているけど、私が袖を振るのを失礼だと思わないでください」

大納言大伴旅人卿

倭道の吉備の児島を過ぎて行かば

筑紫の児島思ほえむかも

卷六 九六七

「大和へ向かう道中に吉備の児島を通ったなら、筑紫の児島が思い出されるだろう」

丈夫と思へるわれや

水茎の水城の上に涙拭はむ

卷六 九六八

「立派な男子だと思っていた私が、別れに際し水城の上で涙を拭っていることであらうか」

水城で交わされた別れの歌

天平二年(七三〇)冬、大納言に昇任した大伴旅人は大宰府を離れることになりました。

水城で旅人を見送る人々の中に、娘子児島の姿もありました。別れを惜しんで児島が二首を詠むと、旅人もまた二首を返します。



水城東門